「会議室」作・浅野宇泰

そこに地雷はあった。

シンプルで無機質な灰色の会議室は窓からの光が差し込むばかりでまだ暗かった。部屋の照明のボタンを見つけ出した送崎（おくりざき）は、ふぅと一息つく。一番の後輩である彼が誰よりも先に来なければどんな叱責があったもんだか分かったものではない。ひとまず一番に会議室に到着したことに安堵した瞬間、会議室の扉が開いた。

「あぁ、送崎。お疲れさま」

顔面に疲れと印字されていたのは同期の渡土（わたりど）であった。彼の表情に印字されている文字はここ数ヶ月しっかりとプリントされていて消える気配がない。

「渡土。寝れてる？」

「……ご覧の通り」

「なるほど」

わずか三言のか細すぎるコミュニケーションで会議室は静まりかえった。正確に言えば渡土の重そうな鞄のチャックの開閉音がして、資料を取り出す音が聞こえたほかは無音のため息の音がしたのだろう。

あと数分で会議の時間だった。次にドアノブに手をかけたのは、山急（やまいそ）であった。

「昨日さ、淵路（ふちじ）に頼まれた仕事って終わった？」

対面早々、業務連絡である。この人の脳内にはコミュニケーションという言葉は多分無い。もしかしたら人工的なＡＩによって制御されているのだろう、おかげで飲み会を開催するわけでも世間話に花を咲かせるわけでもない山急のことを案外悪くは思っていない若手も多いようだ。

「え、なんのことですか？」

「いや、だから淵路言ってたよ。渡土にお願いしとくからって。ほら、こないだの品田会長のやつ」

「あぁ……本当ですか、自分に？」
「聞き違いだったかな」
「……そうだといいんですが」

あまり先輩の非を願うものではない、と思った送崎だったが、多分山急さんに限ってはそんなミスは起こらないだろうとも同時に考えた。その後、頭の中で渡土の冥福を祈っていると、淵路がやってきた。

「あ、おはようございます。あの、皆さん大変お待たせいたしました。貴重な時間を、すみません。はい、お掛けになってください。えっと、あと一名。世木さんだけまだ来ておりませんか？」

いつものように懇切丁寧な口調で淵路がお行儀良くまくし立てた。これが彼のスタンダードであり、どんなに自分の立場が上だろうが下の立場の人間のことはお構いなしに極端な敬語武装でコミュニケーションを仕掛けてくる。

「はい。自分が一番でしたが、世木さんまだみたいです」
「そうでしたか、ご回答いただき誠に感謝いたします。もう間もなく到着のご予定かと思いますので、それまではしばしご歓談のほどお願いいたします」

もしかしたら淵路も脳内にＡＩを飼っているかもしれないと思った送崎であったが、後半の文言を聞くに結婚式場のＭＣも飼っているかもしれないという推測もよぎった。

世木がやってきたのはその会話から十分後のことだった。その間に適切な『ご歓談』が行われたかと言えばその限りではなく、案の定、淵路が頼んだ仕事を渡土が誤認していた件について見えない糸が張り詰めたような緊張が会議室を支配していた。

「ごめんごめん、お待たせ。はい、これで全員。お手洗いとか、いい？　いい。では始めましょう」

世木が手のひらを自分の前に突き出して、申し訳ないのジェスチャを繰り返しながら席に着く。仮に遅れたのが自分だったり渡土だったりした場合にはその手のひらは我々に張り手となっ

て襲いかかってくる一番の可能性を秘めた人物である。

ここで誤解を解きたいが、そんなことが頻繁に行われる空間では決してない。人間というのは一人の人物であれど一枚岩ではなく、一人の人間の中にさまざまな側面が存在し、その時々の状態によって機嫌というものも左右しどういったリアクションが展開されるかは未知数である。暴力的な行動は誰しもが起こりうることかもしれないし、世木さんの場合はその可能性が他の穏健な人々よりも少しだけ数値が高い、ということである。この弁明も、いや弁明でも忖度ではなく、この私、送崎という人物の一人生観に基づくものである。と言うことを残しておきたい送崎であった。

同時に、誰に話しているんだろうと送崎は自問自答していた頃、一つ咳払いとともに淵路が口火を切った。

「はい。では改めまして、本日の議題を説明したいと思います。進行は私、淵路でございます。よろしくお願いいたします。それでは皆様、事前にお渡ししておりました資料はございますでしょうか。はい、渡土くんの資料と同じものです。はい。『「糸」と「系」、似すぎているくせに違う意味が離れすぎている上に「糸」は果たして糸を形容するのに適切な形状なのか審議委員会』でございます。皆様の忌憚なき意見をよろしくお願いいたします」

定刻より十二分後、会議は開催された。争点の中心は糸という漢字の形状ということで激論が繰り広げられた。例えば、

「一本の糸を表現しているのならば、下の二つのちょんちょんは何を表しているのか。ゴミなのか。ゴミだとしたら一つの字にする上で不必要なのではないのか」

と評したのは渡土であった。その意見に対して、

「漢字たるもの、その体裁は保たねばならぬ、それはいわゆる糸という字のプライドそのものであり、すなわちそれが糸のアイデンティティではなかろうか」

と反論したのは山急であった。

「漢字たるものと言えば、それでは『一』という漢字はどうなる。この方が糸っぽいのではな

いか」

さらに被せてきた世木の意見には渡土は強く頷いは。それに同調するように送崎が援護射撃をする。

「そもそも『一』という漢字に糸的な意味を持たせるのではいけないのでしょうか。音読み訓読みで意味の違う言葉もたくさんありますし」

そこに地雷はあった。

突如として淵路は烈火の如く怒りだし、机の上に置いてあったボールペンが先陣を切ってはじけ飛んだ。その後、各々の資料に淵路の唾が飛散。誰がどう端から見ても、その光景は悲惨そのものであった。

どうして。送崎の脳内にはそれしか残らなかった。自分はただ『一』という字に意味を複合することを提案しただけである。どうしてこんなにも叱責されなければならないのか、淵路の言をフラッシュバックしてみる。

「『一』というのは、すなわち、『一』なのであります。分かりますでしょうか。唯一！　一番！　ナンバーワン！　オンリーワン！　ファースト！　トップ！　そう、この文字の、この『一』が言わんとする理念はそれ以上でもそれ以下でもないのです！　何がこの『一』に糸の意味をもたせようですか、そんな不埒な所業は許してはなりません！　それを歪めようとするならば、私はどんな行動も厭いません、例え人格攻撃だってしてみせましょう！」

人格攻撃はいけないでしょう、と思ったがその言葉を飲み込んだ送崎は前言をあっさりと撤回した。

結果。『やはり糸は糸であり、系は系なのである』として日本語水準協会漢字課に審議書を提出するには至らなかった。それもこれも全ては私の脳内で繰り広げられるお人形遊びに他ならない。

目をとじて、脳みその中で架空の人々をでっち上げて架空の問題に直面させる一人遊び。そうすることによってだんだん眠たくなってようやく眠りにつけるというライフハック。

どうしても寝れぬ夜がある時に脳内で開催されてよく分からぬまま夢世界へ突入する思考のワンダーランド。本日は「人には見えぬ地雷があり、いつ何時それが爆発するか分からない」をテーマに舞台を会議室に設定。新入社員送崎を主人公にしてお届けいたしました。

おわり